



# 出服計画

最強格闘家  
人妻  
N下  
調教  
後編



## 鳳凰院涼香

(ほうおういんすずか)

本作のヒロイン。29 歳。幼い頃から父を師として太極拳を学んできた。世界太極拳大会第一位の実績を持つ、日本最強の格闘家のひとり。プロの太極拳アスリートとして活動するだけでなく、いくつかの太極拳教室の指導者をしている。反社の流入で治安が悪化した故郷の西我世（にしがせ）の街を守るために、ボランティアで自警団を結成し、そのリーダーを務めている。正義感が強い勝気な性格で、流麗なチャイナドレスをあらゆる場所を着ることで反社を威嚇していて、街の人々からの信望も厚い。しかし、同時に敵も作りやすく、いくつかの勢力から恨まれている。10 年前、ある劣悪な犯罪者ふたりを警察に突き出したことがある。夫の雄介は幼馴染で深く愛し合っているが、子供が長くできていないのが悩みの種。また、雄介とのセックスでは一度も絶頂を経験していない。

## 鬼貫剛士 (おにつらたけし)

無職。39 歳。典型的なガタイのいい  
ゴロツキ。10 年前に涼香がムショ送  
りにした強淫常習犯。粗暴な性格で、  
女性の暴行が趣味。涼香のことを逆  
恨みし、報復を果たそうとしている。



## 坪内壮真 (つばうちそうま)

デジタル編集者。31 歳。10 年前、  
鬼貫と婦女暴行を繰り返し、その様  
子をビデオで撮影してショップで  
販売していた。鬼貫とともに、自分  
をムショ送りにした涼香に復讐を  
図る。



## 雁月義雄 (がんつきよしお)

涼香の父の同門の初老の太極拳武術家。涼香の恩人で、父とは  
袂を分かったものの、今でも道場同士で交流がある。

## 鳳凰院雄介 (旧姓加賀谷)

涼香の夫。涼香の幼馴染で、かつての同門。デザイナーを仕事  
にして、涼香の活動を陰ながら支えている。

## 目次

第四章	汚される日常、破壊される尊厳（後編）	6
第五章	堕ちていく最強格闘家	62
第六章	決戦	121
エピローグ		150

※本書は一八禁の同人誌です。一八歳未満の購入を禁止します。

## 前回までのあらすじ

鳳凰院涼香は東京にほど近い西我世の街で活躍する太極拳格闘家。太極拳の世界大会で優勝するほどの強さを持ち、太極拳の指導者としても優秀。さらには反社の流入で治安が悪化しつつある西我世を、自警団のリーダーとして守っていた。西我世の誰もが彼女を慕い、尊敬していた。また、彼女も愛する夫と西我世で充実した暮らしをしていた。

そんな彼女に邪淫の魔の手が迫る。

鬼貫剛士と坪内壮真。ふたりはかつて西我世で婦女への性的暴行を行おうとするも、当時学生だった涼香に叩きのめされた上で警察に突き出され、10年間ムシヨ送りにされていた。そのふたりが出所して、西我世に帰って来たのだった。

ふたりは何者かの支援で涼香の自宅を突き止め、涼香の不意を突いて拘束、性的凌辱の限りを尽くした。さらにその際に撮影した映像をネタに脅迫、涼香に自分たちの言うことを聞くように命じる。

その後、ふたりは涼香の指導先の太極拳教室にまで姿を現し、門下生からは見えない事務室で涼香を犯し始める。

涼香は果たしてこの淫獄を抜け出し、ふたりに正義を貫くことが出来るのか……。

## 第四章 汚される日常、破壊される尊厳（後）

（な、何のつもりなの……!?!?）

鬼貫に犯されながら、涼香は青ざめた。

分かってるのは、自分の太極拳教室に、自分を陥れた強姦魔の一人……坪内が乗り込んできたこと。

そして自分は、事務室の扉のすぐそばで、もう一人の強姦魔である鬼貫に辱めを受けている真っ最中で……つまり、自分が少しでも声をあげれば、道場に集まっている門下生たちにすぐにバレてしまうということ。

鬼貫と坪内に何らかの狙いがあることは確実だった。

だが、今の自分にはそれが分からない。

「……っ!」

質問代わりに鬼貫を睨む。相変わらず絶頂に近いが、意識が外に向いたことで、多少の猶予が来ている。

涼香が何を言いたいのか、鬼貫はすぐに察した。

「へ、へへ。気になるか？ 道場の様子」

「あ、当たり前でしょ……！ 貴方の相棒……坪内は何のつもりで……！？」  
「まあ待ってろ。面白いことが起きる」

(面白いこと……！？)

坪内の声に、道場で準備運動を行っていた門下生の一人……二〇代の女性が反応する。

「あ、はい。ここ、太極拳教室ですが、参加希望者ですか？」

「ええ。護身術に興味あって。最近、世の中が物騒なので」

爽やかな声で答える坪内。涼香の喉元に、「どの口が」という台詞がこみあげるが、もちろん声には出せない。

「わかりました。せんせー、稽古の参加希望者が来ましたよー？」

事務室に近づいてくる門下生。

もちろん、事務室の扉はさつきから開きっぱなしで、自分はそのそばで鬼貫と性器同士で繋がったままだ。

(……っ！　これが、狙いで……！)

この男たちは、さらに自分を窮地に追い込むつもりなのだ。坪内はそのために一芝居を打ったというところ……。

鬼貫は自分に視線を合わせて、にんまりと微笑んでいる。してやったり、といった顔だ。

（ど、どうしよう……!!？ このままじゃ、バレル……!! 私の全部が、終わる……!!）

とにかく、門下生を事務室に入れてはならない……涼香はとっさに声をあげた。

「こっちにも聞こえているわ！ ありがとう！ 参加希望の人には、少し待っていてもらえるよう伝えてくれる？」

普段通りの声を心掛ける……しかし、緊張のあまり喉が強張り、妙なイントネーションとなってしまう。

門下生は扉の前で立ち止まり、不思議そうに続ける。

「でもせんせー、今のうちに書類を書いてもらった方がいいんじゃないですか？」

「そ、そうね。後で私が持つて……んああっ！」

「せんせー？」

首をかしげる門下生。一方の涼香は右手で口を押さえ、必死に声の漏れを

防いでいた。

何故ならば……鬼貫が再び激しいピストンを再開したから。

涼香は門下生が目の前にいて、こちらに気を向けている状況で、鬼貫の抽送を受けているのだった。

「ふっ、ぐう……っ！ んふうううっ」

「おお、頑張つて堪えてやがるな！ だが、まんこの締めまりも良くなった……！ 恥ずかしさで感度が上がってやがる！ いいぞ、いいぞおっ！」

（こ、この男……っ！ どこまで私を弄べば……！）

鬼貫を睨みつけながら必死に地面についている右足に力を入れて、鬼貫の責めを受け止める。

声を出すだけでなく、まかり間違つて膝の力が抜けて床に転べば、無残な姿を門下生に見せることになる。

「んっ、ふうんっ、んぐううっ！」

「大丈夫ですか？ 今、変な声が聞こえたような……」

門下生は心配そうみ事務室の前にいる。今にも入ってきそうな雰囲気だ。門下生が男性なら事務室に入るのを躊躇うかもしれないが、相手は女……。

(ま、まずいわ。このままじゃ、本当に……！)

涼香は必死の思いで、平常に近い声を捻り出した。

「んんっ……！ ご、ごめんなさい、ちよつと今、立て込んでいて……」  
「立て込んでいて？」

「今日、実は『あの日』で、下着、汚しちゃって……」

「え……っ！？ ああ、なるほど……、多いと大変ですものね……」

「そ、そうなの……！ だから、ちよつと今、入ってこれれると……んああっ！ 困るというか……恥ずかしい、というか、ああっ！」

「わ、わかりました……。でも、先生、本当に大丈夫ですか？ 体調が悪そうな声で……。私もあれ、重い方なんで、分かるというか……」

「だ、大丈夫……っ！ 心配し……ふいっ！ な、い……んあつ、でえ……！」  
(……！ こ、こんな、時にいいいいっ！？)

急速に拡大する快感。込み上がってくる甘酸っぱい性悦。

前回の凌辱でイヤというほど感じたオーガズムの予兆だ。だが、今の自分は門下生と会話中……もし、本当にイッてしまえば、それこそ声を抑えきれない。

急ぎ立てられるように涼香は叫んだ。

「と、とにかく、大丈夫、だからあつ……！ 私のは、ほっておい、てえ……っ！ 後でその男のことは、私が、フォローをおお……っ！」

「お、男……！？ 私、参加希望者の性別、まだ言っていないですね？ どうして分かったんですか？」

（しまっ……！）

不用意な発言のミス——鬼貫は楽しくてたまらないといった顔で腰を振り続けている。

もはやなりふり構ってられない……涼香は声を荒らげた。

「な、なんとなく、足音、でええっ！ だから、とにかくっ、お願い、ここから、離れてえええっ！」

「ひいっ！ わ、分かりましたっ！ すみませんっ！」

あからさまに驚いた声をあげながら、事務室から離れる門下生。とりあえず危機は脱したが、内心に安堵はない。

（わ、私は、生徒に、なんてことを……！ せっかく私を心配してくれていた、のにい……っ！）

武術指導者としてあるまじき態度。自分で自分の喉を掻きむしりたくなる。  
「よ、よくもおおつ！ んああつ！？ ひっ、んあつ、あひああああつ！」  
涼香が鬼貫に怒りを向けられたのは一瞬で……すぐに快感の波に感情が押し流されてしまう。

「んあつ！ はっ！ あんあん！ ああああつ！」

感情の乱高下で、声の抑えが効かなくなっている。

（こ、このままじゃあ……っ！ それに、そろそろ本当に、次の抗議の時間でえ……！）

とにかく、鬼貫を満足させることが先決……涼香は覚悟を決めて自分から腰を振り始めた。

「んっ、ふっ、んあああつ！ くふうううっ！」

鬼貫が感極まった声を漏らす。

「へへへ！ こいつ、自分から腰を振り始めやがった！ そんなに気持ちよくなりたいのか。目の前の道場には門下生がいるのに……とんだ淫乱だぜ！」  
（それはあああ！ 貴方たちのせいであえええっ！ でも、今はとにかく、こうするしかあつ……！）

「あつ、ひあつ、ふつ、ひつ、あああああつ！」

オーガズムの予兆が最高潮に達する。あと腰を何度か振るだけで、自分は絶頂を迎えてしまう。

そうになったら自分はどうなるのか。このまま鬼貫を射精させられるのか。もしそれに失敗したら……。

そんな、淫らな不安を覚えた瞬間……。

「おおおおっ！ キタキタ、俺も射精欲キタ……！ お前の腰使いのおかげでキタぞお……！」

（よ、よかった、このままイカせられたら……！）

先日と同じく、鬼貫はゴムなしで自分をハメている。

このまま射精をされると中出しされることになり、妊娠のリスクが生じるが……現状はそれを気にしている状況ではない。

「ところで涼香ア、ものは提案なんだがぁ……！」

鬼貫が優越感たっぷりに、腰を振りながら言った。

「せっかくの生ハメで悪いが、今回は外で出すぜ？」

「あつ、ひつ、んああつ……！ え、外、外お……！？」

「そうだ。さすがに俺もお前を哀れに感じてなあ……。今回くらいは特別に許してやる。怖いだろ、妊娠？」

「そ、それは……」

「代わりに、この事務室のあちこちに俺の精液ぶっかけることになるだろうが、仕方がないよなあ！俺たちの不幸を避けるためだもんなあ！」

(……ッッ！こ、こいつう……！)

涼香は鬼貫の魂胆が分かった。

もし今の話通りになれば、この事務室は精液まみれになる。そしてそのイカ臭い香りで、ここでの行為が門下生たちに露見してしまいかねない。

それを防ぎたいのなら……。

「ほら、どうした？ 返答は？ もう時間がないぜ？」

「ぐううつ！」

時計の針は刻一刻と進む。このままでは、本当に誰かが自分を心配して事務室に入ってきたかねない。

「わ、わかった、わかったからあああつ！出して、私の膣内に、このまま出してええ……！」



それでも無意識のうちに歯を食いしばり、声を抑えようとする。武術家としての矜持と鍛錬が、皮肉にもこんな状況で役に立ってしまっている……。

「おおおっ！ おまんこの中がグニグニ動いて、ちんぽ咥え込んで来るっ！ やっぱり鍛えている奴のおまんこは違うなあ！ それとも、旦那とのセックスで使い込まれたからかあ？ どっちにしても、指導者には相応しくないスケベな身体だあ……！」

「うあつ、んひつ、ふひひいいいっつ……」

波のように次々に押し寄せる甘酸っぱい感覚に情動の全てを持っていかれ、涼香は何の反応も出来ない。

しかもその間、涼香の蜜壺は鬼貫の言葉通り、自分の意思に関係なく、ペニスを呑み込もうとするかのように勝手に動いてしまう。

（こ、このあそこの動き……、私の身体が子種を……精子を求めてしまっている……！？ そんなあ……）

自分の身体が自分のものではなくなっていく感覚。しかし、絶頂の気持ちよさのおかげで、それを肯定的にも捉えてしまう。

（こんな酷いことをされ、こんな気分になってしまおう、なんてえ……！）

「よし……、きちんと中だししてやったぞ。感謝の言葉はどうした？」

「うくっ……、あ、ありがとう、ございますう……っ！」

「無念そうなのがまたそるな。じゃ、引き抜くぜ」

「えっ、や、ちよつと……ふぬひいいっ！」

ずぼりゆりゆりゆ！

鬼貫は涼香の姿勢を変えないまま……つまり、涼香の左足を持ち上げたまま、腰を一気に引き抜いて自分のペニスを膣外に出した。

「うぐっ、ぬふうううううツツツ！」

涼香は反射的に鼠径部に力を込めて、雌溝の中を引き締めようとする。そうでもないかと、膣内に充滿した精液が勢いよく噴出し、床を汚しかねない。

「ふっ、んぐふっ、あんんくうううツツ！」

歯を食いしばり、膣まわりに意識を集中する。

幸い、涼香の身体は本人の意思通りに動き、雌穴からは一滴の精液も逆流してこなかった。

ただ、力を込めているせいか、陰部の赤ビラはヒクヒクと蠢き、陰毛の森が愛液を纏いながらワサワサと震えている。

涼香から身を離れた鬼貫が、感心するように告げる。

「おお、あんだけザーメンを叩きこんでやったのに、全部をまんこのなかにとどめやがった……さすがだ」

「褒められても、嬉しく、ないっ……!」

ようやく身体の自由を得た涼香は持ち上がっていた左足を自分から下ろし、二本の脚で立った。

いまだあそこから波のように押し寄せる快感に膝が崩れそうになるが、気合と筋肉でこれに耐える。

涼香は衣服の乱れをそのままに、フラつくように事務所の机へと向かおうとした。

「おい、何するつもりだ？」

「……ナカの精子を、ティッシュで拭くのよ。このまま指導出来ないし……」

「馬鹿なことやってんじゃねえ。今のままで指導しろ」

「なあっ……!？」

「今みたいにマンコ筋で踏ん張れば、精液は垂れて来ねえだろ？　それでいいじゃねえか」

「い、いいはずないでしょ!?　どれだけこれを維持するのが大変か……!」  
「ちよつと漏れたくらいじゃお前の外見じゃわかんねえよ。夕方に仕事が終わるまでそのままでいろ」

「冗談じゃないわ!　それに、臭いだって……!」

「お前、自分の立場がわかってんのか?」

「……ッ!」

鬼貫がスマホをかざす。そこには今しがた撮影した、涼香との交尾動画が映っていた。

「一瞬あれば、今のお前の痴態を全世界に発信できるんだぜ?　部屋の外にいる門下生たちにLINEやメールで送り届けることだって」

「ぐうっ……!」わ、わかったわ。その代わり、もうここではもう止めて。本当に、このままじゃ……」

「安心しろ。俺はもう退散する。その代わり、坪内は道場に残って、夕方までお前の指導を見学させてもらう。お前が強姦で精液タブタブになったおまんこを抱えて、護身術を生徒に教える光景を記録するために。隠れて搔き出そうなんて思わない方がいいぞ。お前の様子ですぐわかるんだから……も

し約束を破ったなら、今の話はなしだ」

「し、承知、したわ……」

「ほおれ、行ってこい、先生っ！」

「んあああっ！」

鬼貫にヒップを勢いよく叩かれる……その衝撃で思わず鼠径部の筋肉が緩み、ナカの精液がこぼれそうになるが、ギリギリそれを堪える。

涼香は鬼貫の視線を感じながら服装を整え、いつものキチっとしたチャイナドレスの恰好となる。

自分の身体、特に股下に精液と愛液の臭いがこびりついているのは百も承知だ。

だが、このまま講義を行うしかない。生徒に何かを言われたら、先ほどのように、生理を理由に誤魔化すしかない。

（こんな屈辱を受けるなんて……！ でも、今は言う通りにするしか……！）  
肉悦の疼きが続く股下を手で押さえない衝動にかられながら、涼香はよろよろと事務所を出た。

「先生、大丈夫ですか？」

「え……？ ええ、大丈夫よ」

半日後の午後九時三〇分、西我世のアーケード街。

涼香は後ろからの声に、微かな戸惑いとともに応じた。

今日は自警団の見回り日で、涼香は道場を終えた後、そのまま駅前に向かい、自警団のメンバーと合流、皆と一緒に繁華街に出向いていた。

メンバーの多くは涼香の門下生で、昼間の稽古に出席していた人間もいる。声を掛けてきたのは、三〇代半ばの男性だった。

なおも心配そうな顔で、男性は続ける。

「いや……なんだか、お昼からずっと調子が悪そうでしたので……。別の人に聞きましたが、午前中から、そんな感じだったとか……？」

「……ごめんなさいね、そういう日もあるということ。その、私も、避けられないものがあるので」

「ああ……、すみません、立ち入ったことを」

「気にしないでください。私も驚いているくらいですから」

何でもないように笑い流す。

実際は、何でもないのでこの騒ぎではなかった。

つい数時間ほど前まで、涼香は鬼貫の要求に従い、臆内に他人の精子をため込んだまま、太極拳の指導を行わなければならなかった。

坪内は本当に夕方まで指導を見学していて、涼香はあそのナカミを掻き出すチャンスを得られなかった。それに、もしそれをしたことが二人にバレたら、何をされるかわからない。

自分の臆を締めながら太極拳の指導を行うことは、涼香にとって未知の経験で、それゆえに神経と体力を大きくすり減らすことになった。

当然、指導には意識が向かず、おぎなりのものとなった。

必然的に大勢の門下生に心配されることになり……涼香は予定していた通り、「あの日（生理）だから」と言い訳に終始することになった。

太極拳の世界大会に出場した自分が、そして、自分の身は自分で守れるよう指導する自分が、そんな言い訳を強いられた事实は、屈辱というほかない。

だが、真相を隠しとおすには、涼香にはそれしか思い浮かばなかった。

幸い、夕方までに何とかバレーに過ごすことに成功。最後の講義が終わった後のシャワーで、ようやく臆内ザーメンを掻き出すことが出来た。坪内は

最後の講義が終わると同時に、いつの間にか姿を消していた。

とはいえ、日中の疲労までは回復できず……講義以上に気を張る必要のある西我世繁華街の見回りの最中でも、今のような会話を繰り返す羽目となっている。

（私がこんな醜態を晒すなんて……、それも、膣から精液を出さないため、なんていうバカな理由で……!）

屈辱で自分の身を引き裂きたくなる。

（で、でも、とりあえず今日の仕事は、この見回りで終わり……家に帰れば、ゆっくり休める……）

街の治安を守るための見回りで、こんな緩んだ気持ちではいけないことは分かっている。しかし、痛めつけられた心と身体では、どうにもならない……。

……そんなことを思いながら駅前の見回りを済ませ、近くの公園に向かっていた最中のことだった。

涼香にとって、本当の試練が訪れたのは。

「せ、先生、あの人たち……っ!」

自警団の一人が、公園の一角を指さしながら、恐る恐る声をかける。

普段なら夜はひとつこひとりのない公園の一角。そのトイレの側に、大勢の男たちがたむろしていた。

皆、ガタイがでかく、肩や腕に入れ墨をしていて、髪の毛の色が十人十色で、服のガラも悪いという、いかにもな外見。

歳は一〇代から二〇代がほとんどで、何名かアジア系らしき顔立ちのものもいる。

（あの連中……疾龍（トクリュウ）会ね……）

西我世ではそれなりに名の知れた不良少年たちのグループだった。

噂では反社組織に膝まで突っ込んでいるグループで、大人たちから購入した大麻を売り捌いたり、美人局を組織的に運用してパパ活で荒稼ぎしているといわれている。

ここ数年で結成された組織で、名前はもちろん、警視庁などが匿名・流動型犯罪グループを「トクリュウ」と名付けたことから。シャレというか、世間に中指を立てる意味を込めているらしい。

涼香はこれまで何度か、ああやって公共の場でたむろしている疾龍会の少

年たちを諫めたことがあった。

一度だけケンカになったこともあるが、涼香があつという間に全員を叩きのめしてした。以降、不良少年たちは涼香ともめ事を起こしておらず、涼香の顔を見ると、慌てて退散する事が多い。

だが、今回疾龍会の少年たちは、見回りをしている涼香たちの姿を認めると、ニヤニヤした顔でこちらに視線を投げかけていた。以前と違い、まったく恐れているようには見えない。

涼香はカチンと来た。先日からのフラストレーションの発散を、無意識に望んでいたのかもしれない。

（そろそろほとぼりもさめたから、人前に出て来たってわけ？ 本当、反省しない連中なんだから……！）

「ちよつと貴方たち、ここで何をしているの？」

涼香は落ち着いた声で、しかし同時に威圧を込めた声で尋ねた。

涼香に声を掛けられ、少年たちが近づく。中央のスキンヘッドで人相の悪い、いかにもな外見の青年がリーダー格だと涼香は記憶していた。

男たちは涼香の問いに答えず、ニヤニヤと気持ちの悪い微笑みを浮かべて

いるだけだ。

「……もう一度聞くわ。ここで何をしているの？ 貴方たちが公園にたむろしていると、他のみんなが怖がるの。分かっているの？ 前もそう言ったでしょ？」

「へへへっ、さすががこの街の守護者の鳳凰院サンだ。やっぱりいうことがカッコいいねえ」

リーダー格がそう言うと、少年たちはドッと笑った。

完全に大人を舐め腐った態度……涼香は怒気を孕んだ声で告げた。

「何が言いたいのか？ 私に一度叩きのめされたこと、忘れたとはいわせないわよ」

「おお怖い。いや、別に変なこととはしようとはしてねえよ。ただ、俺たちは人を待ってたんだけだ」

「人？」

「他にもないアンタ、鳳凰院涼香サンだよ。先日の御礼をしたいと思いますってな」

「御礼……！！？ 貴方たち、まだ懲りて……！！」

勢い勇むように叫んだ涼香だったが、次の瞬間、リーダーが見せたスマホ

が視界に入り、涼香は絶句した。

「……ッッ！」

そこには、先日の鬼貫たちの凌辱で、涼香が浣腸で糞便をまき散らしている映像が映し出されていた。

(……!! そんな、なんでこいつらが……!!?)

考えられる理由はひとつだけだった。

鬼貫たちが、彼ら「疾龍会」に動画を流したのだ。

確かに鬼貫たちは、動画をどう扱うかについて、なにひとつ涼香と約束は交わしていない。

でも、だからといって……。

(こんな、こんな制御が出来ないような連中に、動画が渡されるなんて……!!?)

「あ、あああ……」

これから自分がどうなってしまうのか、動画がどこまで拡散されてしまうのか、底知れぬ恐怖に一挙に士気が崩れ、次の言葉が出てこない。

リーダーは嬉しそうに口元をニヤけさせ、涼香の前に立った。

そして、後ろの他の自警団メンバーからは見えないようにスマホを見せながら、涼香の肩を叩く。

「これ、鳳凰院サンでしょ？ ヤバイよこれ。この街の反社全員に恨まれているアンタが、こんな動画を撮影されちゃうなんて……致命的だよなあ？」

「……ッ！」

「今の所はこの動画、俺だけが持っているんだけど、どうしよっか。他の仲間たちにデータ渡していい？ DVDに焼いて、AI加工で目線だけモザイクかけてエロビデオ屋で売っていい？」

「や、やめて……っ！ そんな……！」

「イヤだよなあ。あんたには社会的な立場もあるし、旦那もいるからなあ……というわけで」

リーダーの男は、涼香の右の乳房を揉みしだいた。

「……んあっ！」

「俺たちのお願ひ、聞いてくれるよなあ？」

舌なめずりをしながら、涼香に顔を寄せるリーダー。

涼香は絶望的な心境で、頷きながら応じた。

「わ、わかったわ……けど、お願い、他のみんなを、先に帰させて……」

「もちろん。俺たちの狙いはあんたひとりだ。鳳凰院サンには、まだみんなの憧れの的の最強武術家でいてもらわないと、俺たちも滾らねえからなあ」

「……ッッ！」

「すぐにここに戻ってこい。戻って来たら早速始める」

涼香は自分から振り向き、それまで心配そうに自分の背中を見つめていた自警団のメンバーたちの元に戻り、こう声を掛けた。

「みんな、ごめんなさい。私、彼らと話し合いをすることになったから、ここで今日は解散にさせて。私については、心配しなくていいから……」

「いやっ、ちよ、そんな、乱暴に、しないでえ……っ！」

五分後……涼香は男たちにトイレの裏に連れ込まれ、全身を滅茶苦茶に揉まれていた。

バスト、ヒップ、太もも、腕、二の腕、髪、そして股下……ありとあらゆる場所に男たちの掌が伸び、まさぐられている。

いつの間にか首に首輪も嵌められ、あらぬ方向に引っ張られてもいる。

ただ、服はまだ、脱がされようとはしていない。

（こいつら、私をこの姿のまま、いたぶろうと……！）

チャイナドレスを身に纏った涼香の姿は西我世の平和の象徴で、同時に反社会的な男にとつての憎しみと恨みの象徴なのだ。

あくまでこの姿の自分を汚して気を晴らそうとしている……そこまで分かりながら、抵抗の術がない。

（わ、私、このまま犯られてしまうの……！？ この男たちに……！ 一〇人以上はいるのに……！）

先日、鬼貫と坪内の二人を相手にしただけでも、あれだけ疲弊したのだ。

今日一日、鬼貫の姦計で消耗を強いられ、その上でこの仕打ち……自分がどこまで耐えられるか、見当がつかない。

（こんな男たちに、子供たちに、社会のクズどもに……！）

「んあつ、はあつ、あんつ……」

怒りと屈辱が湧き上がるが、それ以上に官能が襲い掛かり、内心に反して甘い声が出てしまう。

さすが女の扱いに慣れたヤンキー少年たち、女性がどう撫でられれば気持

ちいいのかを熟知している、荒々しさの中に丁寧さがある手つきだった。

リーダーが両手で涼香の胸を愛撫しながら告げる。

「へっ、ただ身体を撫でられているだけで可愛い声を漏らしやがって……いくら最強の格闘家だからって、雌は雌ってことか」

「うっ、ふあっ……!!」

「鬼貫さんたちにかなり痛めつけられているみたいだな。因果応報だぜ」

「あ、あなたたちは、奴らと……!!?」

「そうさ。最近になって連絡を取り合うようになった。お前への報復が出来るって聞いてな。お察しの通り、映像もそっちからだ。嬉しいだろ? 自分の痴態を俺たちに見てもらえるんだから。身体を張った性教育だ」

「だ、誰が、嬉しいなんて……っ!」

「いいのか? そんなに威勢よく逆らって? 俺たちはお前に腐るほどの恨みがあるんだ。この動画を脅しのダシにして、どこかのホテルに連れ込んで、一晚中マワしても構わないんだぜ? お前が体力が尽きてへたばっても、んなら気絶したって構やしねえ。俺たちは鬼貫さんたちとは別の意味で雌の扱いに慣れてる。一晚三、四発くらいはへでもねえ。ひたすら中だししまく

ってやる。誰の子供が出来るか楽しみだな？」

「ぐ、くうっ……！」

（そ、そんなことを、されたら……っ！）

リーダーの言葉に嘘はないだろう。自分は彼らにそれだけのことはしてきている。

しかし、その結果として自分の身に降りかかる運命を考えると、恐ろしくて仕方がなかった。

鬼貫たちのような性犯罪者たちだけでなく、「疾龍会」のような年端もいかない輩たちにマワされて子供を孕んでしまい、それが公になれば、本当に自分の人生は終わってしまう。

こいつらに汚されるのはもはや止められない。だが、妊娠だけは避けなければならぬ。

「どうする？　今の所俺は最初からそのつもりだが、お前が俺たちにしおらしい態度を見せてくれれば、多少は手加減してやつてもいい」

（こいつら、私を従順に扱うために……！　で、でも、逆らえない……！　いうことを、聞くしかない……！）

これはいつかの反撃のための、一時的な方便……そう自分の中で念じながら、涼香は答えた。

「わ、わかりました。どうか、私に慈悲をかけてください……、要求には、出来るだけ従いますから……」

「いい心がけだ。じゃ、まずは俺たちに謝れ。誠心誠意を込めて。身体を俺たちに撫でられながら」

ゴロツキ少年たちに身体を好きにされながら謝罪を口にする……あまりの状況に気が狂いそうになるが、涼香は必死に内心の猛りを抑え込んで、口を開く。

「わ、私、鳳凰院涼香は、こ、これまでの皆さんへの振る舞いを、しゃ、謝罪させて頂きます。難癖をつけたり、暴力をふるったりして、す、すみません、でしたあ……！ 心から、反省、していますううっ……！！」

「よし。じゃあ、その反省を態度で見せてもらおうか」

「た、態度で……？」

「俺としちゃ、一方的に全員で犯してまくつても悪くないと思つてたんだが、それだけじゃあ面白くねえって意見が多くてな」

つまり、性的な奉仕をしろ、と言いたいのだろう。

確かに、これまでの鬼貫たちのようなやり方では、自分にそこまでをさせるのは難しい。

（こ、こんな男たちのために……っ！　でも、一晚中輪姦されて、妊娠のリスクを負うのは避けないと……）

「わ、わかったわ。その代わり……」

「おう、今日はここで、ひとり一発で済ましてやる。マワされるのは同じだが、延々されるよりはマシだろ？　日付が変わるくらいには解放してやるよ。俺たちも明日は仕事だの学校だのがあるしな」

「わ、わかりました……。ぐ、具体的、には……」

「こういう場合はフェラが王道だろ。口でチンポ咥えて、唇とか舌とかで気持ちよくさせてイカせるんだよ。旦那にはそれくらいしてやってるんだろ？」  
そんなプレイは、雄介との性交では一度もない。要求されたことも皆無だ。夫は、そういう行為を女性にやらせるべきではないと思っっている。

涼香がコクコクと頷くと、男たちは手を離れた。

そして、地べたにへたり込んだ涼香の前にリーダーが立ち、ズボンをずり

さげた。

「へへっ。じゃあ、お願いしてやろうかな」

ボロン、と音が出るような勢いで、涼香の目の前に、リーダーの勃起したペニスが姿を現す。

（こ、このおちんちんも、大きい……っ！）

今日ハメられたばかりの鬼貫よりは少し小さいが、それでも、夫のそれよりはずっと大きい。

こんなモノを口で奉仕しないといけないなんて……舌を噛み切りたいほどの悔しさを覚える。

「へへへっ、昨日風呂で掃除したばかりだからな。臭いがキツくなくて申し訳ねえ。鬼貫さんからの連絡も突然だったんでね」

「あ、ありがたいことだわ……」

「憎まれ口はいいから、さっさと始めろ。まずは舌で亀頭を掃除だ。さきつぽからカリの裏側まで入念に」

「わ、わかりました……」

（こんなもの、犬にかまれたと思えば……！）

先日の連続強制排便と比べると楽なものだ。リーダーのいうとおり、ペニスから漂う異臭がそれほどきつくもないのも心理的な負担を軽くしている。

涼香は心を無にして、舌による奉仕を開始した。

長い舌にたっぷり唾液をためて、亀頭全体を濡らすように舐め取っていく。

じゅぷ、じゅるるっ、ちゅるるっ！

「んっ、はっ、ふうっ、ちゅっ、ぶじゅるう……」

「そうそう、分かっているじゃねえか。最強格闘家としての才覚ってやつか？ フェラってのは要するに顎と舌の筋肉を動かすことだからなあ。お前みたいな強い女なら、口でチンポ舐めるのが上手で当たり前かなあ。人体の構造もよく知ってるだろうからなあ」

男たちの下卑た笑い声。涼香は目の前のペニスを噛みちぎりたい衝動に耐え、奉仕に意識を集中する。

ある程度亀頭を舐めた後、続いてペニスを口に含み、唇を使つての抽送を開始する。もちろんそれに合わせて舌で陰茎や亀頭も舐め続ける。

「くっ、こいつ、何も言っていないのに、勝手に口に咥えてはじめて……！ あ

あくそつ、でも気持ちいい……！　こんなフェラ初めてだ。こいつ、本当にフェラの才覚ありまくる……他の女と、全然違う……！」

「んぶつ、じゅぶ、ふつ、ぶじゆるるっ……！」

涼香は何も聞こえないふりをしながら行為を続ける。

ただ、内心では、これまでに感じたことのない、官能の高まりも覚えていく。

自分が男を悦ばすのに適した身体であることを、今、自分は証明してしまっている。

恥ずべき事なのに、でも何故か、嬉しさを感じてしまっている……。

（な、何なの……？　この気持ちと、身体の火照り……、でも、今はこいつを気持ちよくさせないと……！）

「んぶつ、ふつ、じゅぶつ、れろれろ、れろおつ」

舌と唇が慣れるに従い、動きが大胆になっていく。

ペニスを喉元まで押し込み、そこからゆっくりと舌で舐めながら引き抜いたり、同年代の女性より強い肺活量を活用して、思い切りペニスそのものを吸い込んだり、舌で激しくカリの底を穿ったり……。

「んぐぶっ！　ぢゆるるるるる！　ぐふふっ！　ぢゆるるるる、ぢゆる！  
れろれろ、れろろっ！」

「おおおっ！　こいつのフェラマジやべえ！　なんだこれ？　本当にこいつ  
人間か！？　他の女のまんこでコキ捨てるよりも気持ちいかもしれねえ……  
……！」

気持ちよさと驚きが混じった声で叫ぶリーダー。

近くの仲間のひとりが「それ、さすがに大げさすぎるんじゃないすかあ？」  
と軽い調子で尋ねる。

「ホントだって……！　もう、こいつのフェラを知った後じゃ、他のフェラ  
じゃ満足できなくなりそうだ！　ああくそっ、出る、出る、出る……出る！」  
最後には自分から腰を振ってピストン時の摩擦を高めながら、リーダーは  
涼香の口の中に射精を放った。

どびゅ！　どびゅどびゅ！　どびゅどびゅどびゅ！

「ふぐううっ！　んっ、ぶふふううう！」

一番の喉奥に突っ込まれた状態で射精が放たれたことで、放出された精液  
はダイレクトにその先に向かう。

粘ついた白濁液が喉に絡み付き、鋭敏な表面を焼きながら胃へと降りていく異様な感覚。

味は塩辛い。精子特有の不愉快なイカくささが鼻と口に突き抜けてきて、思わずむせそうになる。

「んぐふふっ！　んっ、んぐむふううううう！」

涼香はその全てに必死に耐えながら、努力して現状を保つ。

普通の女性なら即座にペニスを吐き出して嘔吐していただろう。

だが、幸いにも、いや不幸にも、涼香にはそれに耐えうる意思と身体があった……。

「すげえこいつ、喉奥で出したのに、精子全部吐かずに吞み込みやがった。なんて女だ。規格外すぎる……」

恍惚とした声で呟くりーダー。取り巻きの男たちも、唾然とした顔で涼香を見つめている。

口中の精子を全て飲み込んだ後、涼香は自分からペニスを口から引き出そうとして……慌ててりーダーに後頭部を掴まれて、無理やりに再び前に押し込まれる。



「こ、こいつのフェラ、マジすげえ……神フェラだ……、太極拳とフェラの相性がこんなにいいなんて……。まあ、太極拳で大事なのは呼吸、フェラも大事なのは呼吸だから、そういうもんなんだろうけどなあ……」

「まじすか？ こいつ、そんな口が名器なんすか……」

部下の問いに、リーダーは信じかねるように答える。

「ああ、こいつ、仕込めば本当にすごい雌になる……、これまで一〇〇人以上の女を抱いてきた俺が言ってるんだ。間違いねえ……」

部下たちが「マジか……」「こんなクソ暴力女が……？」とざわめく。

そんなわけがあるはずない……涼香はそうすぐに反論したかった。

しかし、リーダーの言葉に理があることは、今、自分自身が示してしまっただ。

（そ、それに、何なの、この気持ち……、こんな奴に性奉仕を強いられたのに、う、嬉しい、なんて……！）

自分が女性として……女として正當に評価されているという悦び。これまでの自分では感じられなかったもの。夫とのセックスでさえそうだった。

（こんな気持ち、抱いてはいけないのに……、私は、屈するわけにはいかな

いのに……!)

「あがぁっ……!」

突然、首に嵌められた首輪の縄を引っ張られる。

「おい、まだ終わっちゃいねえぞ!」

ズボンをはきなおしたリーダーが声を荒らげる。

「俺は済んだが、まだまだお前に性奉仕されたい連中は残っているんだ。さつさと準備しろ……おい、次は誰だ? 希望者は?」

「俺、俺がやりたいです!」「いや俺だ!」「俺俺!」「俺のほうがこいつ悦ぶよ!」

リーダーの部下たちが次々に名乗りをあげて、涼香の前に立ってズボンを下ろして男根を露出させる。

涼香の目の前に、何本ものグロテスクな形状の男のモノがずらりと並ぶ。

(こんな一杯のおちんちんを、相手にするの……!?! 一本一本、啜えないといけないの……!?!)

リーダーは呆れたようにため息を吐いた。

「昨日までの敵にガつつきすぎだ。でもまあ……おい涼香、こいつら一度に

全部相手しろ。そうしないと時間がもったいねえし、こいつらも抑えが効かねえ」

「ぜ、全部……!?!? 一度に……!?!?」

「そうだ! 最強格闘家のお前なら、これくらい、どうにかできるだろ! こいつらを全員平等に気持ちよくしろ! 休んでる暇はねえぞ! さもねえと……」

「わ、分かりました、分かりましたあ……!」

自分の痴態が映し出されたスマホを見せられ、涼香は恐怖に突き動かされるように、新たなペニスに口で挑みかかっている。

時間の押し迫る中、最初から口に含んで唇でシゴきにかかる。二人目の男もそれを望んでいたらしく、文句を言わずに口元を嬉しそうにゆがめている。

「じゅぷつ、んふつ、ぐじゅぷ、ぢゅううう……」

「お、おとおっ! リーダーの言った通り、これほんとすげえ! 人生で最高のフェラだ……!」

「だろ、だろ?」

まわりの他の部下たちが、興奮もあらわに叫んだ。



「ち、畜生、美味そうにチンポ頬張りやがって……！ もう我慢できねえ！ おい鳳凰院サン、口では後でいいから、手で俺のをしごいてくれよ！ その世界を相手にした掌でさあ！」

「俺も俺も！ 口しても、両手はまだ使えるだろ？」

「てめえら抜け駆けずりいぞ！ だったら俺は髪を使わせてもらう！ ながーいポニテを俺のザーメンでベトベトにしてやらあ！」

「俺はチャイナドレスの股布だ！ 純白スベスベの生地、べったり黄ばんだ染みを着けてるからなあ！」

「ふ。ふっ！ んんっ、おぐうううううう！」

次々に涼香に近寄り、ありとあらゆる場所に陰茎を擦り付けていく男たち。（め、目の前に、男たちのペニスがいっぱいいい……っ！ これ、全部奉仕しないとイケないの……！！？）

信じかねる思いを抱くが、現実には性欲を持て余した勃起チンポが並んでおり、これを相手にしなければ、自分は帰れそうにない。

「おらあっ！ 頑張っつて全員分しごくんだよ！ まだまだこれは前戯で、本番はこれからなんだからなっ！」

「んじゅぷうつ！」

ペニスを頬張ったまま、首輪の紐で首をあらぬ方向に捻られる。痛くてたまらないが、ここで声を上げてても状況は改善しない。

(ま、負ける、わけにはあ……っ！)

涼香はそれだけを思いながら、全身を使つて男どもの長槍を慰撫し続けた。

そして、さらに一時間後……。

「んあつ、ひあつ、も、もう、やめてえ……っ！」

「こんな気持ちいいこと、止められるかってんだ！」

涼香はトイレの陰で、引き続き疾龍会の少年たちに辱めを受けていた。

今度は先ほどまでのような口淫ではなく、本番の行為……膣に男根を入れてのセックスだ。

それも、ひとりひとりにかわるがわる、という流れ。

言うまでもなく、ゴム無しで連続で中出しされている。

この状況になつてからすでに数十分。何人相手にしたかよく覚えていない。ただひたすら、路上に寝転がされて股を大きく開かされ、交配を強制されて

いる。

衣服は着たままだが、所々破かれ、ボロ布のようだ。その下の黒タイツも同様に、胸元やお尻などの局所が破かれ、乳輪や尻肉などが丸見えになっている。

体位はバックで、破けた股下の隙間から挿入されている。時折、先ほどと同じようにチンポを咥えさせられながら、四つん這いの状態で後ろから突かれている。

幾度もの中出しで涼香の膣内は精液まみれで、交わる男が腰を振るたびにナカの液体が攪拌されて外に掻き出され、異様な水音を響き渡らせている。

ずちゅ、ぐじゅちゅ、ぐじゅぶちゅ！

「んひあああああつ！ ひあつ、んあつ、ああつ！」

これまでのひたすらな口淫、続けての連続本番で、さすがの涼香も体力を大きく削られていた。

ただ、悲しいかな、最強の武術家ゆえか、あそこから生じる快楽に「ヨがる」程度の体力はまだあり、男たちのピストンのたびに身体をくねらせ、口からは甘い喘ぎ声を発してしまっている。

（く、悔しいっ！　でも、これにも耐えないと……！　耐えて、家に……雄介の元に、帰らないとお……！）

「はあはあはあっ！　なんて女……！　こんなにみんなで犯しているのに、まだ元気に跳ねやがる……！」

快感と驚きと悔しさが混じった声で、今涼香を組み敷いている男が声をあげる。

「こっちはこんなに腰振って、必死にイこうとしているのに、ぜんぜんへたばらねえ！　リーダー、本当にこいつ、一人一回で済ませていいんですかつ！？」

「仕方ねえだろ、鬼貫さんとの約束なんだ。やりすぎて壊したら、今までの全部がおじやんになるんだと」

「みよ、妙な話、ですわね……！」

「知らねえよ。それにてめえら、みんなやった後はへたばって、逆に涼香に食われる勢いじゃねえか」

「し、仕方ねえじゃないすか！　こいつ、体力が無尽蔵で、まんこもグニグニ動いて、搾り取られそうになるんですよ。俺だって、もう、イキそうで……」

…!!」

ほどなく涼香を犯している男に限界が近づき、ラストスパートに向けて激しく腰を振り始める。

「ハアハアハア……!! 出すぞ、クソチャイナ、出すぞ、出すぞ……!! ううっ、出る……っ!!」

どびゅ! どびゅどびゅ、どびゅびゅびゅ!

「ひあっつ、んああああああっ!!」

膣内に熱い感覚……男が発射した精液が蜜壺を駆け巡り、ドロドロのそこをさらにドロドロにする。

気持ちよさと気持ち悪さが同時に襲い掛かり、背筋がゾクゾクする。

「はあっ、はあっ、はあっ……、くそっ、マンコがあんまりにも跳ね回って、もうでちまった……、なんだんだよこいつ、本当に人間かよ……」

忌々しそうにペニスを涼香から引き抜く。

酷い言葉を投げかけられているが、男たちは終始そうなので、涼香はもはや気にもならなくなっている。

そんなことよりも、大事なものは……。

(ま、また、イカずに、済んだ……)

絶望的な状況にもかかわらず、安堵が胸に宿る。

(まだ、この連中には、一度も、イカされてない……)

ここではすでに一〇人以上にハメられているが、いまだに鬼貫に犯された時と同じように絶頂を経験していなかった。

理由は涼香が堪えているというのもあるし、男たちのセックスが稚拙で、涼香の気持ちのいい所を的確に摩擦していないというのもある。あまりこう思いたくはないが、雄介とのセックスとさほど変わりが無い。

(これなら、最後までそうならずに、済むかも……)

さんざん犯されてはいるが、イカされずに済んでいるという状況は、涼香にとって救いだっただ。

それなら、雄介にもある意味で申し訳が立つ……と、その時。

「おう、よろしくやっているようじゃねえか」

「おつ、お疲れ様です、鬼貫さん」

(お、鬼貫……ッッ!?)

背後を振り向くと、そこには今朝に自分を犯したばかりの鬼貫が現れ、リ

ーダーと会話をしていた。

反射的に殴り掛かりたくなるが、周りに男たちがいることを思いだし、どうにか堪える。その代わりに、憎しみを込めて睨みつける。

鬼貫も涼香の視線に気づき、ニヤつきながら近づく。

「へへへ、まる一日ぶりだな。どうだった？ 俺のザーメンをまんこに溜めながらの指導は。いいまんこ鍛錬になっただろう？ で、トドメにこうやって不良のガキどもにマワされて……いやあ、無様なもんだな」

「あ、貴方が、そう仕向けたのでしょうか……!!？」

「そうさ。映像をネットにアップしないとは言ったが、知り合いに渡さないとは約束しなかったからな。お前の確認が不足してただけだ」

「……ッッ！」

「にしても、こんだけのガキを相手をして、身体もまんこも精液まみれで、まだ威勢よく吠えられるとは……やっぱ、世界最強の格闘家は違うな。ひとり一回、なんていう制限をつけなくても良かったかもしれないねえ。ったく、つまんねえ枷つけやがる」

（枷……？ 私をいたぶるのに……？ 誰が……？）

鬼貫が誰かの指示でそうしているということは、鬼貫の上に誰かがいるということになる。

おそらく、あくまで仲間である坪内ではないだろう。

つまり、この件には、鬼貫以外の黒幕がいる……。

（そいつを暴き出せば、私は逆転できる……？）

微かな光明を見つけた気持ちになる。

もし、それが実現できれば、この連中に報復を食らわせられる。

「じゃあ、俺も一発、やらせてもらおうかな？」

改めて鬼貫を見ると、他の男たちと同じようにズボンをずりさげ、いきり立った陰茎を外に出していた。そしてそのまま、涼香へと歩み寄ってくる。

陰茎は相変わらずの大きさと太さ。これまで相手していた疾龍会の連中とは比較にならない。

度重なる性交で、あそこの感覚が鋭敏になっている今、あんなものを突っ込まれたら……。

「な、何を考えているの！？ さつき散々に……」

「いいだろ別に。こいつらにお前を脅迫するネタを渡したのは俺だし、そも

そもこんだけやられてマンコの中が精子でドロドロになってる状態じゃ、ひとりでくらい相手が増えたってそんな変わんねえだろ」

「だからって……!!」

「お前だって、このガキどもの半端なチンポじゃ、満足できないって顔してるぜ?」

「そ、それは……!!」

「ただのカマかけだったが、案の定か。つまりお前は俺のチンポに教育されただ。俺のくらいでかいチンポじゃないと満足できない身体にな。それえっ!!」

そういつて鬼貫は、愛液と精液と汗を吸ってべっとり黒タイツが肌に張り付いている桃尻を両手でつかみ、男根を涼香のあそこに押し込んだ。

ズブズブッ!　グズブズブッ!　グジュヂュブ!

「んあひいいいいいい!!」

これまででない快感が腰から背骨を通って脳天に直撃する。自然に感極まった声が出てしまう。

そして、一瞬遅れて……。

「んあああああつ！ ダメ、来ちゃらめええ！ イクツ、イクウウウウウウウツ！」

コンマ秒も経たず、涼香は氣をやってしまった。

絶頂と同時に涼香は背筋を背中側に大きく反らせ、舌を天に突き出し、涎をはじけさせる。

「んひあああつ！ そんな、挿入された、だけ、なのがいいいいつ！」

「へへへつ！ 俺の言った通りだろ！ お前のおまんこは俺に調教されてるんだ。もう、元には戻れねえよ」

（そ、そんな……！！ 雄介のチンポじゃ、もう、満足できなくなっちゃったってこと……！！？）

自分でもそうなつても仕方がないと思えてしまう。鬼貫のペニスはそれほどまでに巨大で逞しい。

「そんな、いやあああつ！ あつあつ、んあひあつ！」

「いやいや言いながら、身体とまんこは正直だな！ 自分から腰振ってるし、自分からまんこグニらせてるぜ。ホント、スケベなだぜえ！」

鬼貫は嬉しそうに涼香の桃尻を掌ではたきく。その痛みさえ、涼香には快

感に轉換されてしまう。

「んあっ！ あっ、ひあっ！ だめ、気持ちいいっ……！ あっ、だめ、んああああっ！」

「こんだけ強姦されて気持ちよくなっちゃもうたあ、罪な身体もあったもんだ、それそれ！」

「んぎっ！ 深すぎいいっ！ ひあああああっ！」

鬼貫の腰使いに、表情も心も蕩け切っていく。

涼香の変質に、少年たちも興奮を隠しきれない。

「さ、さすが鬼貫さん……！ この暴れ馬みたいな雌を、完全に乗りこなしてる……」

「すげえ……、俺たちじゃ、襲っている側なのに、押され気味だったのに……」

「んあ？ だったら、お前らも楽しんでみるか？」

「楽しむったって……」

「こなふうになあ！」

「んひああああっ！」

それまでバックから涼香を犯していた鬼貫が、突如として涼香の両足を持ち上げて宙に浮かせたかと思うと、涼香と繋がったまま涼香の身体を反転させた。

これで涼香は正面立位、いわゆる「駅弁」の形で犯されることになってしまった。

「この女、ケツでもいけるんだぜ？　こんなふうに」

「んぎひいいいいっ！」

鬼貫は両手を涼香のお尻に添えて身体を抱えながら、何本かの指で肛門のまわりの肉ビラを開いて見せた。

「先日、散々にアナルでイジメてやったからな。きっとチンポも易々と呑み込んでくれるだろうさ」

「鬼貫さん、そ、それって……！」

「そうだ、二本挿しだ」

（に、二本挿し！？　前と後ろに同時に……！！？）

確かに先日は、前にバイブを挿入され、後ろで浣腸をされるという「二本挿し」だったが、今回は両方の穴がおちんちんに埋められることになる。

「そ、そんな……っ！ や、やめて、ふたつの穴の両方に挿入されたら、壊れるううっ！」

「笑わせるな。世界最強の太極拳の使い手が、二本挿しくらいで壊れるもんかよ。おい、そういうわけで、誰かこいつのケツアナにチンチンを捻じ込め」  
「あ、じゃあオレやります！ 一度女のケツって犯してみたかったんですよ」

少年のひとりが嬉々とした声で応じる。髪を赤く染めて、いかにもおちやらけた感じのある男だ。

鬼貫に抱きかかえられ、何もできない涼香の背後に回り込み、鬼貫の指で拡張された雌穴に先を向ける。

「おいここだぞ、間違えんなよ」

「分かってますって。じゃあ、いただきます」

「ちよ、待って、お願いぎほおおおおおっ！」

メリメリメリ、メリメリ！

ズブズブズブ、ズブズブ！

赤髪の男のペニスが涼香の菊門を貫いていく。まったく抵抗がないようで、

すんなりと腸内に入っていく。

数秒とたたず、涼香の身体に、二本のペニスがずつぷりと差し込まれることになった。

「ひあつ、ぐあつ、んああああつ……」

「へへへ、これで二本挿しは完了……。おいどうだ、初めてのアナルの味は」  
「なんか、まんこと違って、最初から最後までキツキツですね。ゴム穴にちんこ突っ込んでるような……。でも、それがなんか、たまんねえっす」

「そこがケツの良い所よ。じゃあ、同時に動いて、この雌を気持ちよくしてやろうぜ」

「わかりました！　じゃ、せーのっ！」

赤髪の男と鬼貫は、同時に腰を振り始めた。

グジュバジュブジュ！　ヂュクヂュクヂュク！

ズブズブズブ、ズクズクズク！

「あぎひいいいっ！　んぎあああああああつ！」

もはや悲鳴とも嬌声ともつかない声をあげる涼香。

アナルの強烈な異物感は浣腸時と同じだが、今回は二つのペニスがほぼ同

時に抜き差しされるため、膣と腸内を隔てる敏感な部分の隔壁が前後から同時に圧迫され、凄まじい快感を生じさせている。

「あぎっ！ いぎっ！ これダメ、ダメエエエ！ ぎぼちよすぎいいい！ 狂う、狂う、おまんこ狂う、お尻の穴も狂う、狂っちゃううううっ！」

「狂え狂え！ お前はこれからどんどん、まともなセックスは出来なくなるんだ。今狂った方がマシだ！」

「いやっ、いやっ、いやあああああっ！」

首を激しく振って抵抗する合間にも、蜜壺と雌穴、そして両者から襲い掛かるペニスで圧迫される個所の気持ちよさは高まっていき、やがて……。

「はひういっ！ そんな、来る、来ちゃう、同時に来ちゃう……！ 両方、来ちゃううううう！」

どこに何が同時に来るのか、それは涼香自身が口にしなくても、涼香をサンドイッチにして犯している二人には、すぐに理解できた。

「へへへっ！ おい、この女、雌マンコとケツマンコ、同時に気をやりそうだと言ってるぜ？ どうする？」

「どうするって、決まってるじゃないですか。同時に果てさせてやりましょ

うよ」

「そうだな！ おら涼香、俺たちもそろそろイクぞ！ お前がケツとマンコと同時にイクのと同時に中で出してやる！ 感謝しろ！」

「そんなっ！ いやっ、あつ、んひあああああつ！」

お尻の穴と膣内、同時に絶頂するなんて、どんな媒体でも聞いたことがない。しかしその状況は、今まさに自分の身に迫っている。

もし、そんな気持ちよさを、味わってしまったなら……恐怖で身が震えるが、同時に、そんな気持ちよさを味わってみたいという、女としての欲求も生じる。

混乱の中、涼香は叫び続けることしかできなかった。

「いやっ、そんなのいやっ、ああでもっ、いい、気持ちいいっ！ 来る、同時に来る、ホントに来る、イクイクイクイク、イグウウウウウウウウ！」

「こっちも出すぞ！ 出る、出る、出るうっ！」

「お、俺も……っ！ で、出るっ！」

びゅるるっ！ びゅぶびゅ！ ぶじゅびゅるるる！

どびゅ！ どびゅどびゅ、どびゅびゅ！

前後のペニスから同時に吐き出される灼熱の精液。腸と膣内にその熱さが精子が肉に向けて噴き出される圧迫感とともに生じ、それが最後の一押しとなつて涼香は前と後ろの穴の双方で同時に達した。

「んぎひいいいいいいいっ！ んほおおおおおおおおおおお！」

（続きは製品版でお楽しみください）